

## 貴重なアルバムを発見。 若いアーティストの生き生きした表情

大阪中之島美術館開館一周年記念「佐伯祐三 自画像としての風景」展がはじまっている。たまたま、佐伯祐三(1898~1928)の姪で、ハープ奏者となった杉邨てい(1911~1945)のご親戚にお会いする機会があった。

祐三の実姉・文榮(1888~1956)は、現在の大阪市北区の光徳寺に生まれた。祐三より10歳上のお姉さんである。港区市岡の杉邨章作(1881~1956)に嫁いだ。1998年の佐伯展のとき、章作と文榮の御子息(祐三の甥)の杉邨房雄さんから、佐伯が《滞船》の連作や《肥後橋風景》(大阪朝日新聞社所蔵)を描くとき、イーゼルや画材などを運ぶのを手伝ったお話をうかがったことがある。

その房雄さんの妹が杉邨ていで、渡仏は裁縫の勉強目的、ファッションの勉強であったが、パリに着いてから心境の変化があり、ハーピストの道を選んだ。房雄の娘さんである三浦路さんが御所蔵の杉邨家のアルバムを今回、調べることができたのである。

アルバムには、ていの写真が多く残され、祐三のパリのアトリエで撮影された写真のほか、凱旋門の上やリュクサンブール公園、イタリアのヴェニスやピサなどで撮影された写真があった。本紙表紙は、自室でハープを前にした写真で、背後の壁にある写真は恐らく彼女のハープの先生だろう。

渡仏直前のていの写真は、学生風の質実な服装だが、パリでは、おしゃれな帽子をかぶり、垢抜けしたモダンガールの出で立ちの、生き生きした姿で写されている。同じ時期に



パリにて。帽子などファッションもモダン

パリに遊学していた小説家の久生十蘭(1902~1957)とも恋愛関係にあったという。

昭和7(1932)年に日本郵船の榛名号で帰国したらしく、日本でもハーピストとして活躍し、ソリストとしてや奏者4人でのコンサート写真がアルバムにある。長谷川時雨の原作・大和楽舞踊劇「あかつき」の舞台写真には、オーケストラピットにハープが加わっており、これにも出演したのかもしれない。

高田ハープサロンのホームページにある「日本ハープ物語」によると、昭和16(1941)年の東京交響楽団の団員

名簿に彼女の名がのっているらしく、彼女の音楽家としての活動について、今後コンサートの記録や音楽団体の歴史などを掘り下げていく必要がある。

しかし、パリから帰国して華々しく活動していた彼女だが、戦争が勃発して音楽活動は制限されていたかもしれない。警視庁発行「音楽技芸者之證」や常時携帯の「音楽挺身隊」の会員証も遺品として残る。さらに終戦直前の昭和19年、悲劇がおきる。盲腸の手術は難しいものではないが、術後34歳の若さで亡くなるのである。戦時中で十分な薬もなく、痛みを散らすため、やむを得ず民間治療的なことを行い、容態を悪化させたことを、祐三の兄である佐伯祐正の夫人・千代子が長く悔やんでいたという。

杉邨ていも30歳で死んだ佐伯祐三と同じく悲劇の芸術家であった。しかし、杉邨家のアルバムに「これはひょっとして」という、微笑ましい写真を見つけた。

祐三の父・佐伯祐哲とその妻のタキを囲んで子どもたちが集まっている佐伯家の集合写真である。成人した写真と照合すると、後ろに立つ文榮の前、祐哲と並んで左にちょこんと



佐伯祐哲と妻のタキ(左端)を囲む佐伯家の子どもたち。右端が文榮、その前の少年が祐正(左)と祐三(右)。

腰掛ける少年が祐三だろう。シャッターを押す瞬間に目をつぶっているのが、いかにも無頓着な祐三らしい。

新発見のこの写真が、佐伯祐三のもっとも若い時の肖像となるが、幸せそうな集合写真を見ていると、悲劇的な生涯で語られがちな佐伯だが、恵まれた家族環境が芸術家としての感性を養い、まっすぐに自分の道を進んでいったことが分かる。杉邨ていもまた、恵まれた環境のなか、家族や親族の応援に支えられて音楽に邁進していたに違いない。

### 筆者プロフィール 橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学名誉教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス/モダン都市の現像―』(創元社)など。